

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
多様な人々と協働し、個性や能力を發揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。		○ICT機器の活用により、児童の興味・関心が高まり主体的に学ぼうとする意欲の向上につながった。 ○児童自らが考え仲間と共に課題解決する取組を進めたことにより多様性への理解を深めたり、コミュニケーション力を高めたりすることができた。 △いじめの未然防止に向け、人権学習を基盤とした心の教育を専門家の活用も図りながら組織的に進める必要がある。	全ての児童がつながりながら、将来の社会的な自立を目指して力を伸ばし合う学校づくりを行う。 そのため、「学び合う」「高め合う」「認め合う」をキーワードとし、具体的目標 ①考えをもつ②考えを伝える③自分の力で挑戦する④仲間と問題を解決する⑤相手の立場で想像する⑥違いを認める の6点を重点とし、学校経営を進める。 それらに取り組む重点的な場を「①学習指導 ②児童活動 ③児童支援」とし、全ての教職員が分掌して目標の達成に迫る。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	○学び合いによる主体的な学びや探究的な学びを進め、生きて働く知識・技能、思考力、自律的に判断し行動する力、他者と協働する力など確かな学力を育てる。 ①教科の見方・考え方を働かせる授業づくりを行い、思考力・判断力・表現力を高める。 ②タブレット端末等のICT機器を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に進める。 ③総合的な学習の時間を中心として探究的な学びを進め、仲間との学び合いを通して課題発見、解決できる力を身に付ける。 ④峰山学園が目指す「探究し続ける子ども」の実現に向け、小中が連携し授業改善を行うと共に、家庭学習の目指す姿を追求する。	○「つながりの中で学び合う力が豊かに育つ授業づくり」を研究主題として研究を積み上げることができた。より良い学び方として重点に掲げた6つの力を意識したり、教科の見方・考え方を働かせたりする授業づくりを進めたことにより、京都府学力・学習状況調査（国語、算数）の結果が昨年度に比べ向上した。 ○タブレットを学びの道具として児童が主体的に使えるようになったり、他者参照をすることで自分の考えを深めたりできるようになってきている。更に効果的な活用について研究を進める。 △総合的な学習の時間には課題設定からまとめまでの一連の流れによる学びは実現しているが、連続性のある探究的な学びについては今後研究を進める。 △約3割の児童は自ら計画を立て主体的に家庭学習に取り組めていない状況にある。【児童アンケートより】峰山学園が目指す児童自らが学習の主体者となり自己調整しながら学んでいける力をつけられるよう指導や支援を行う。
	生徒指導	○相互に認め合い、高め合う活動を通して、自己肯定感と共感的な人間関係を醸成する。 ○組織的な児童支援を行い、不登校、不適応、いじめを未然防止する。 ①児童自らが考え、話し合い、判断し、問題を解決する自主的・自律的で自治的な活動に取り組む。 ②不登校・学校不適応の未然防止、解消に向け、個々の児童のアセスメントを丁寧に行い、学習指導・教育相談・特別支援等の多面から個に応じた適切な支援を行う。 ③スクールカウンセラー、児童養護施設、医療、福祉等との情報連携・行動連携を丁寧に行う。 ④峰山学園内での校種間連携を強化し、早い段階からの移行支援に取り組み円滑な接続を目指す。	○児童自らが主体者となる行事や取組を設定し、重点に掲げた3つのキーワードを大切に指導や支援を行った。互いの違いを認め合い、折り合いを付け協働しながら取り組む中で、自己肯定感や他者を理解する力を伸ばすことができた。 △しかし、自分の思いや考えを安心して表現できないと答える児童が3割程度あり心理的安全性の高い集団づくりを進めていく必要がある。 ※児童アンケートより 「自分に良いところがある」・・・・・・・・・・84% 「みんなと一緒に何かをするのは楽しい」・・・・・・・・94% 「学校で安心して自分の思いや考えが表現できている」・・72% ○外部機関との連携や専門家の活用、校内での組織的な児童支援により、不登校や登校渋りが改善されてきているケースがある。 （学期に10日以上欠席の状況 1学期：4名 2学期：3名） △今なお厳しい状況にあるケースもあり、不適応・不登校（傾向）の解消に向けて、専門家等と連携しながら取組を強化する。

健康（体育）・安全	○心身ともに健康な生活に自ら取り組む意欲と態度を育て、望ましい生活習慣を確立させる。 ○交通事故防止を徹底し、児童の安全を守る。	①望ましい生活態度や健康づくりに向けて、児童が自分の生活を振り返り、考えることができるよう生活習慣に関する指導を計画的に行う。 ②メディアコントロールできる力を育めるようPTAや峰山学園と連携し、児童・保護者の学習・研修・啓発を進める。 ③登下校の安全確保と事故防止に関して、地域の安全ボランティア組織と連携した取組を進める。	○非行防止教室や食に関する学習等の外部講師による指導や長期休業明けの「生活リズム確立の取組」等を通して児童が自らを振り返り元気で健康に過ごすためにどうすればよいかを考えることができ、実践しようとする姿が見られた。 △4、5年生が峰山学園「SNS講習会」に参加しゲームやネットの使用について考え自分自身を振り返る機会となったが、行動実践に結びつかない児童が少なくない現状である。 ○PTAや安全ボランティア等と連携し登下校の見守りを行い、事故やけがもなく安全に登下校することができた。峰山町内に熊が出没した際には、PTAで即時、熊よけ鈴を購入してもらい児童の安全確保につながった。
特別支援教育	○将来の社会参加に向けた自立を支援するという視点を大切に、一人一人の教育的ニーズを整理し、すべての児童が自分らしさを伸ばし合える環境をつくる。	①「多様性を尊重する」という方針の下、全ての児童が取り組み、力を伸ばし合える学習指導や特別活動を追求する。 ②校内に学習ルーム等を設置し、必要な児童への個別の支援が行えるようにする。 ③特別支援学級では、個々の児童に応じた支援計画と教育課程をつくり、地域と連携した生活単元学習を中心に得意を伸ばす指導をする。 ④保護者と定期的な懇談を行い、合意形成を図りながら、一人一人に応じた合理的配慮を行う。	○特別活動においては、常に児童全員が主体的に参加できることを目標とし、児童が「やってみたい」と思える課題を設定した。児童は互いの違いを認め合ったり、相手の思いを想像したりと試行錯誤しながら取り組んだことで、不登校傾向の児童も含め全員が参加（スポーツフェスティバルや秋祭りという学校行事）し達成感や充実感を味わうことができた。 ※児童アンケートより 「人が困っているときは進んで助ける」・・・92% 「失敗してもあきらめず挑戦している」・・・82% 「物事を最後までやり遂げようとしている」・・・80% ○複数対応を基本として保護者との懇談を行い、課題の共有、ニーズの把握等を行い一人一人の課題に応じた対応を進めることができ、登校や学習機会の保障につながった。 ○配慮を要する児童に対しては丁寧なアセスメントのもと、個別の指導計画や教育支援計画の作成・見直しを行い、個々の児童の実態に合わせた指導や支援に活かすことができた。特別支援学級における生活単元学習では教科学習と関連付けながら学びを進める事ができ、学習に向かう意欲が向上し基礎基本の習得につながってきている。 △愛着形成に課題のある児童や、貧困等の厳しい状況にある家庭へのケア・支援をさらに工夫する必要がある。
開かれた学校づくり	○保護者や地域と連携・協働し、児童の将来の社会的自立に向けた教育活動の工夫改善を行う。	①地域性を生かし、地域の人材を活用した学習活動を創意工夫して実施する。 ②保護者や地域に対して、本校の方針や教育活動についてホームページ等を通して発信する。 ③学校評議員、学校関係者評価委員、峰山学園学校運営協議会の意見・評価から学校経営等を改善する。	○峰山町内の企業や峰山高校、学習支援ボランティア等、外部の方の支援を受けて教育活動を進めることができた。地域の方々から直接受ける指導や支援は児童にとってとても新鮮で魅力のあるものとなり、学習意欲の向上だけでなく、将来の夢や郷土愛の育成にもつながった。 ※児童アンケートより 「今、住んでいる地域が好きですか」・・・・・・・・・・96% 「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」・・・84% ○本校の方針や教育活動を随時ホームページで発信し、保護者や地域の方に興味をもっていただけた。（ホームページ閲覧数：月平均2900件）また、行事や各種委員会で、本校の教育活動や取組の意義について説明を行うことで、本校の教育方針を理解していただくことができ、肯定的な評価をいただくことができた。
次年度に向けた改善の方向性	(1)認知能力と非認知能力を一体的に育む指導を充実させ、主体的・協働的に学びに向かう力を高め、学力格差を改善する。 (2)児童の主体的・自主的・自律的な活動をより一層進める中で、心理的安全性を高め、自ら考え判断し、協働して問題を解決する力や自治の力を高める。 (3)一人一人の児童のニーズに応じた適切で効果的・継続的・計画的な指導・支援を全ての教職員が行えるようにするため、年間を通して実践的な研修を積み上げる。 (4)全ての児童に学校での学びを保障する観点から、児童個々の特性・特質・差異・選択を尊重し、不登校、いじめ、家庭の貧困や教育力の課題などに対し関係機関と連携したチーム支援を一層強化する。		